

茶の湯 文化学会 会報

第118号 / 2023年9月27日

発行 茶の湯文化学会

京都市左京区下鴨森本町15

生産開発科学研究所内

〒606-0805

TEL 075-702-9270

FAX 075-702-9314

E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

No.118

令和五年度大会報告

田中秀隆

令和五年度六月十日（土）、学習院大学 南三号館二〇一号室において、大会が行われた。コロナ禍をへて、対面とZoom配信を並行させるハイブリッドでの初めての形式での大会実施となった。東京での大会開催自身、久しぶりのこともあり、早朝から大勢の方に参加していただいた。（対面での参加百七十九名、配信での参加三十九名）。総合司会は依田徹理事が務めた。

令和五年度六月十日（土）、学習院大学 南三号館二〇一号室において、大会が行われた。コロナ禍をへて、対面とZoom配信を並行させるハイブリッドでの初めての形式での大会実施となった。東京での大会開催自身、久しぶりのこともあり、早朝から大勢の方に参加していただいた。（対面での参加百七十九名、配信での参加三十九名）。総合司会は依田徹理事が務めた。

午前・午後の研究発表を挟む形で、開催された総会では、令和四年度の事業報告ならびに決算、令和五年度の事業計画ならびに予算が原案通り承認された。

令和五年度からの役員の選出において、新たに選任された役員は、

副会長 岡本浩一、監査 影山純夫、理事 仲隆裕（近畿）・吉江勝郎（北陸）、幹事 降矢哲男（近畿）の各氏である。なお最後に会員より、東京例会での資料が企業でのHPで流用されたという件についての質問が出、岡本副会長から説明があった。

午前の発表の部では、岩崎正彌理事の座長により、次の四本の研究発表が行われた。

一 荒井欧太朗（学習院大学人文科学研究科美術史学専攻 博士 後期課程三年）「宗受宛宗旦書状にみる名物の認識 柳営御物と天目・天目台中心に」

二 廣田吉崇（京都芸術大学非常勤講師）「逸話の創造と展開―『細川三斎茶書』の意義について―」

三 佐々木隆（別府大学文学部人間関係学科准教授）「高齢女性の将来的な社会的孤立防止に向けた茶会の可能性―人口減少がある大分県宇佐市封戸地区の交流事業での活動実態から―」

四 倉林重幸（豊田市生涯活躍部博物館準備課事業企画担当）「近世後期〜明治初期 三河足助地方紙屋鈴木家の茶の湯」

各報告内容については、報告者からの要旨が改めて『茶の湯文化学』に掲載されるので、ここでは、従来になかった佐々木氏の報告について触れるにとどめておきたい。

佐々木氏の発表を聞くために参加したという参加者が質問に立つ

たことが印象的であった。佐々木氏の専攻は福祉学であり、高齢化と過疎化に悩む集落において、地域での「交流場所」や「相談できる仲間」を作る必要を発見された。

そこで、社会的な関係を形成する実践を模索する中で、氏が鎮信流の茶道を实践されていることから茶会が研究室の学生たちを巻き込んで実施されることになり、茶会を实践した結果を報告したものである。

報告の舞台となった大分県宇佐市封戸地区に限らず、「人口減少」「高齢者の社会的孤立」は、全国的な問題であり、茶道界の高齢化にも顕著なものがある。茶会が人と人とを結びつける役割を持つことを確認する形になった報告は、参加者に実証的な研究報告とは一味違った感銘を与えたのではなからうか。

東京育ちの人間には、地方では、日常的に濃密な人間交流が行われているようなイメージを勝手に抱

いていたが、「雇用労働のように昼休みに談話することが少なく、「物理的に」背を向けて業務に取り組む」という指摘は意表を突かれたように感じた。

それよりも、茶会実施に際して、「点前は大事だけれども、参加者同士が仲良くなってもらうことが最大目標」として指導されたという点も、忘れてしまいがちな盲点で、日常の茶会においても参加者相互の間に和をもたらす心がけがどこまで徹底されているかと反省させられた。

茶の湯文化学会での研究発表は、歴史学、美術史に軸足を置いたものが主流となっているけれども、このような現代的な関心に応え、これからの茶の湯の在り方のヒントを与える発表もとめられているのではないかと感じた。

午後のシンポジウム「江戸時代の茶の湯 ―そのイメージ再考―」は、田中の司会により、以下の六本の発表で構成された。

一 平木しおり（京都芸術大学通信教育部非勤講師 SOAS ポストドクトラルラリサーチャ―）「御成からみる寛永前期の茶の湯の位置」

二 依田徹（遠山記念館 学芸課長）「幕府老中と茶の湯―稲葉家と阿部家―」

三 関口敦仁（愛知県立芸術大学美術学部特任教授）「文化地理的分析からみる江戸の茶会」

四 片山まび（東京芸術大学美術学部芸術学科教授）「寛永年間の「御本茶碗」から「倭館窯」の成立背景に関する一考察」

五 石塚修（筑波大学人文社会系教授）「文治政治における武士の茶の湯―『鑑の権三重帷子』の記述から―」

六 谷村玲子（国際基督教大学アジア文化研究所研究員）「江戸時代前期（十七世紀）の女性の茶の湯」

これらの発表に関しても要旨が『茶の湯文化学』に、会誌二十二、

二十三号程の分量ではないが、二十九、三十三、三十七号より十分な紙面をとって報告されるので重複はさけない。

ここでは、従来のシンポジウムでは、総合討論の時間が最後に設けられているのに、設けられていない理由を述べる形で補足する。

これまで東京での大会では、「江戸・東京の茶の湯」、「岡倉天心と明治の茶の湯」と東京ならではのテーマを取り上げることを恒例としてきた。時代は、近代に軸がおかれていたので、今回は、時代を、近世にすることはすぐに理事会での合意事項となった。しかし、「江戸の茶の湯」とのテーマを前に、どこに焦点を絞ったらいいか、答えはすぐには、みつからなかった。そこで、総合討論はやめて、いろいろな切り口の発表数を並べようと試みた次第である。

しかし、平木氏が、江戸初期の茶の湯を語る時に定番であった「数寄屋御成」を見直すという視

点を提示された結果、すべての発表はそこに緩やかにつながったのではないかと考えている。

司会者として反省すべきは、定刻終了を至上命題として、関口氏の発表時間を大幅にカットしてしまつたことである。手に入る限りの江戸初期の武家の茶会記をデータベース化した上で、それを現在の東京との関係がわかるようにするというマッピングの作業をしていただいた。同年の誼と、一日かけても発表しきれないくらい中身が詰まっているからということでは非情にチャイムを鳴らした無礼なお詫びしたい。

参加者の皆様にもつと知りたかつたとの不満を残した結果となつたかと思うが、関口氏の寛大な好意によって、氏のマッピングをより充実させたサイトを作り、そのサイトへのアクセスを茶の湯文化学会のホームページから可能にしてくださいとのことである。期待していただきたい。

今回、対面とZoom発信での大会運営が可能になつたのは、東京例会での運営に経験を積んだ学会の若手理事・幹事の活躍があつてのことである。しかし、それに加えて会場を引き受けていただいた島尾新学習院大学教授の研究室が院生を総動員して、バックアップして下さらなかつたら決して可能ではなかつたであろう。

島尾教授ならびに研究室の院生諸氏にこの紙面をかりて御礼申し上げる次第である。

島尾教授には、大会の閉会の挨拶までお願いして、その後会場を、池袋に移して久しぶりに懇親会が行われた（参加者四十九名）。

乾杯の発声に立たれた河合正朝（慶応大学名誉教授）は、翌日の見学会会場である護国寺の檀信徒総代という立場から歓迎のあいさつを述べられた。

久しぶりに行われた懇親会では、親しく近況報告からはじまり研究上の情報交換の輪が、循環し

ていった。中国はもとより、アメリカからもこの大会を目指して、若い研究者が参加していることが印象的であつた。

中締め挨拶をされた影山純夫監事は、大会での発表で、いかに茶の湯が権力と結びついたものかを痛感し、日本史を研究していくうえで不可欠な分野であることを強調されつつ、「わび茶」を究明する方向での研究の必要性を述べられた。

見学会について

依田徹

大会の二日目は、護国寺茶寮（文京区音羽）の見学会を行った。護国寺は徳川綱吉によって建てられた真言宗寺院で、元禄期の本堂が空襲を免れてそのまま残されている。大正期に檀家総代となつたのが高橋箒庵で、その働きかけにより、関東大震災により被災した松平不昧の墓所が護国寺へと移された。以後、箒庵は護国寺を東京の茶道総本山と位置づけ、数寄者、道具商らに働きかけて茶室群を整備していく。当学会では、約四半世紀前にも護国寺で見学会を行ったが、これは参与であつた戸田勝久先生の提言によるものである。戸田先生が逝去されたのが本年五月九日であるが、その約一月後に護国寺見学会を行うことに、不思議な因縁を感じさせられた。

当日、午前中は雨模様であつた



大会・シンポジウム

が、午後には一時晴れ間も見える程度に回復した。案内をしていたのは、護国寺で茶寮を管理されている伊澤元祐氏の案内である。午前から午後にかけて、一組十五名、計五回の見学会を行った。最初は護国寺茶寮の中心である「月光殿」において、茶寮の歴史が説明された。「月光殿」は桃山時代に園城寺日光院に造営された建築で、主殿造りを踏襲した古様の建築として、現在は国の重要文化財に指定されている。明治以降は御殿山の原六郎邸に移築されていたが、箒庵の働きかけで護国寺に移築された、以後は大茶会の会場として用いられてきた。

その他、馬越化生の「化生庵」、堀越宗円の「草雷庵」、それに「月窓軒」などが案内された。特に今回伊澤氏は、近江の園城寺から移築された「月光殿」に合わせ、同じく近江の石山寺をイメージした多宝塔が造られ、鐘楼も三井寺の鐘を暗示するだろうといった、長

年の推理を開陳された。関西圏の方には護国寺が初めてという方も多く、茶会で親しまれている方も説明を聞きながら新しい発見を



見学会（護国寺・月光殿にて茶寮事務局 伊澤元祐様による解説）

したという意見もいただき、好評のうちに見学会を終えることが出来た。

令和五年度総会

総会は令和五年六月十日（土）十三時から、大会会場である学習院大学 南三号館201号室で行われた。最初に第一議案「議長選出」において、吉井清理事が満場一致で選出され、その後は吉井清議長によって進行された。つづく

第二議案「令和四年度事業報告ならびに決算の件」、および第三議案「令和五年度事業計画ならびに予算の件」は、それぞれ報告、提案があり、第四議案「役員を選出」は、岡本浩一理事が副会長に、吉江勝郎幹事・仲隆裕氏が理事に、降矢哲男氏が幹事に選出され、いずれも異議なく全会一致で承認された。第五議案では、会報17号理事会の報告「東京例会の発表資料

（図）をWebサイトに無断転用され、発表者からの再三の抗議によって、現在は削除されている。今後、学会側の対応が必要かどうかも視野に入れて、早急に検討していくこととなった。」内容に関して、砂川佳子幹事から詳しい説明が求められた。東京例会担当の依田徹理事より経緯説明があり、岡本浩一副会長より、例会での発表は研究途中であり、研究が進むことも考え、著作権に関し、今後は発表者自身で自衛をしていたきたい。との見解があった。

例会

東京例会

（令和五年五月二十七日）

「十七世紀前半の千家における珠光認識」

荒井欧太郎

発表では、十六世紀後半から十七世紀後半にかけて、千家で成立

した珠光、武野紹鷗への認識と伝承について考察した。

千利休が珠光の伝承を積極的に広めていたことは、『茶道四祖伝書』・『宗湛日記』といった文献史料から判明する。利休は、珠光が自身の茶の湯の根源と認識しており、それが珠光に関心を抱いた理由と考えられる。一方で、利休が珠光の流れを汲む紹鷗に言及した記録や伝承は、ほとんどない。

利休の孫である元伯宗且は、父の少庵宗淳から継承した千家の茶の湯が、珠光―紹鷗―利休という正統な系譜に連なるものだと言張した。このように宗且は、利休の認識を継承し、珠光を千家の茶の湯の根源に位置付けていた。

宗且の三男である江岑宗左は、千家で初めて利休と紹鷗の師弟関係を明言した。江岑は臨濟宗大徳寺派の禅を父祖代々の精神的支柱とし、珠光・紹鷗・利休が帰依したとされる大徳寺派の禅に注目していた。そこで珠光・紹鷗・利休

という三者の師弟関係を主張することで、千家の茶の正統性を強調した。

江岑は次代に向けて覚書を記しており、当時の千家内部における珠光・紹鷗の伝承も記載されている。珠光の伝承が、宗且の時代以前から存在していたのに対し、紹鷗の伝承には、江岑の時代までに創作・改変された可能性があるものが含まれている。江岑は紹鷗の伝承を利用して、千家内部で「利休の師である紹鷗」という認識の定着を図ったと考えられる。

「小松宮彰仁親王の茶道具蒐集―仙波家と伊木家を中心に―」
依田徹

小松宮彰仁親王は、幕末期に仁和寺宮から還俗した皇族である。明治期の東京茶道界では皇族茶人として重んじられたものの、その茶道に関する具体的な記述は、石黒況翁『懐舊九十年』など限られたものであった。しかし大正十二

年（一九二三）の関東大震災で焼失した文化財を記録した『罹災文化財目録』（國華社）には、橋場の小松宮邸で失われた品々の一部が記録されており、その記述から彰仁親王の茶道具蒐集の一端が確認できる。本発表ではこの『罹災文化財目録』を基に、彰仁親王の茶道具蒐集、さらには周辺の情報について確認した。

彰仁親王は明治十年代に「唐物耳付」「九鬼文琳」「古丹波耳付肩衝 笹枕」など、名物に分類される優れた茶入を買い集めている。特に玄々斎の後援者であった江戸の豪商である五代太郎兵衛（玄誠齋宗意）、同じく玄々斎の高弟であった旧岡山藩の筆頭家老である伊木忠澄（三猿斎）の道具をまとめて購入し、質的にも極めて高い道具を集めていた。さらに明治十七年には石黒のために「半月庵」の額字を、京都の裏千家に「咄々斎」の額字を揮毫している。そして仙波太郎兵衛とその妻である仙

波宗心が、小松宮家と北白川宮家に出稽古に赴いていたことを確認した。明治二十五年に宗心から彰仁親王へと真之真点前の伝授が行われており、玄々斎在判の「夕顔真台子」が献上されている。彰仁親王は名物の蒐集のみならず、真台子伝授を受けた茶人として、明治期の重要人物であったと言える。

近畿例会

（令和五年五月十三日）

『宗及茶湯日記（天王寺屋会記）』に見る戦国期の茶の湯の諸相」

山田哲也

昭和三十一年十二月、永島福太郎先生（一九一二―二〇〇八）の翻刻・校訂により、『茶道古典全集』に堺の豪商津田家三代の茶会記が収められ、書名を「天王寺屋会記」として刊行された。爾来、六十数年経過したが、茶道史研究の第一級の史料としての輝きを失っては

いない。原本の松浦家本の発見者である永島先生により、『天王寺屋会記』と命名されたのであるが、これが松浦家には不評であった。なぜなら江戸時代の再調製時の表紙の外題には「宗及茶湯日記」とあり、天王寺屋などという表記はどこにもなかったからである。元表紙の外題は「茶湯客來之記」、「茶湯并唐物拝見之記」、「他所之茶湯留」などのように各巻で違いを見せており、一様ではない。今回「茶書古典集成」刊行にあたって書名は外題か題箋から採用するという原則が示され、これにより『天王寺屋会記』より『宗及茶湯日記』に改められた。

永島先生は生前『天王寺屋会記』の改訂を願っておられたが、諸般の事情により叶わなかった。今回の「茶書古典集成」ではそのことを念頭に置き、先生の遺された『影印版天王寺屋会記』（一九八九年刊）により、翻刻作業を進め、幾らかでもその責を果たせ

たかと思う。「翻刻は怖いな」と先生が漏らされていたことが思い出される。今回の翻刻で改訂した文字に「南都茶筌」がある。従来は「南殿茶筌」とされていたものであるが、これにより南都茶筌^{II} 奈良茶筌の生産が天文期まで遡ることになった。奈良を第二の故郷と呼び、奈良県の史料に知悉しておられた先生は気付かれていたに違いない。また内容から提起できたことは、「引拙」の存在である。引拙とは『宗及茶湯日記』の外、『山上宗二記』や『神屋宗湛日記』など第一級史料に出てくる名物道具所持者のことであるが、引拙は津田宗達を始め堺衆により、天王寺屋宗伯を抹殺するため創り上げられた架空の人物である。事の次第は矢野環先生の平成十三年十一月十七日の東京例会報告「珠光名物の成立過程——山上宗二記」以前をみる——に譲るが、今後も検証を重ねていきたい。

最後に『宗及茶湯日記』の「宗

達他会記」の多変量解析を試みて、そこに参加した人物の親近性について六枚のネットワークを提示した。

（令和五年三月四日）

「信濃飯田・市岡家の茶の湯」

廣田吉崇

長野県の飯田市立中央図書館には貴重資料として市岡文書が所蔵されている。これを伝えた市岡家は飯田において製糸業や元結製造業を営み、一方で美濃久々利の領主千村氏に仕え、幕領の樽木山を支配する飯田荒町役所の役人等を勤めた家系である。市岡家の文化的業績として本草学が知られるが、市岡文書には他にも興味ある資料が数多くある。このうちの茶の湯・花道に関する資料の多くは宗徧流に関するものである。市岡家が伝えた茶の湯は、山田宗徧の二男であり、桃葉庵と称した山田宗屋の宗徧流であるとされ、遠江横須賀の井田若水を経て、飯田の

大蔵玄信、そして市岡家五代智寛、七代曉智、八代経智、九代雅智と伝えられた。飯田ではこの系統の宗徧流が栄えたが、一般の茶の湯系譜には記されていない。なお、市岡文書には宗徧流六世山田宗字が「栗田宗字」の名であられる。また、市岡文書には異色の茶書として『織部流茶道書』がある。これは七代曉智が書写したものとされるが、独自の教えが含まれている。しかしながら、この茶書の教えの一部は五代智寛が三十一歳の時にあらわした『台子手前』という文書にも記されている。すなわち、この織部流の教えには、智寛およびその子である曉智の二代にわたり目にふれる機会があったものと推測される。ただし、この茶書が市岡家にいたった経緯等は不明である。

「定家筆 詠草」「泊瀬山」と俊成・伝 西行・定家筆「小色紙三筆」の表装

中村幸

定家筆 詠草「泊瀬山」（近衛家陽明文庫蔵）は、近衛家熙（一六六七～一七三六）が表装して最も用いた茶掛である。一方、一九八〇年からの冷泉家時雨亭文庫公開調査で見えられた、俊成・伝 西行・定家筆「小色紙三筆」（冷泉家時雨亭文庫蔵。以下「三筆」と称する）は、西行と定家の関係が窺える新史料とされ、昨今、西行の真筆も判明したが、表装の考察はされていない。

本発表では、まず「泊瀬山」の上下と、「三筆」の中廻・風帯の白地花木尾長鳥文縫紗（以下「縫紗」と称する）に三か所の柄の一致を明示し、両幅の縫紗を同定した。

ついで『槐記』『御茶湯之記』『他所之茶事道具献立之留』『錦小路頼庸朝臣記』から、仙台藩茶道

役の山本宗林が縫紗を家熙へ献上し、正徳三年（一七一三）頃に「泊瀬山」が仕立られ、その後「三筆」が修復された見解を述べる。他方、江戸初期に和歌などの古筆の茶掛が流行ると、時雨亭文庫に盗難が相次ぎ、朝廷と幕府は寛永五年（一六二八）に文庫を封印した。よって「三筆」の修復は、勅封が解かれた享保六年（一七二一）以降と推察する。そして風帯にみる極めて類例の少ない柄の構成は、家熙表具の可能性を示唆し、これについては今後の課題としたい。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でお知らせはしておりません。

東京例会

令和五年十月十四日（土）

（会場）埼玉会館6B会議室・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～

「初代・根津嘉一郎の茶室」

下村奈穂子

「茶経」に関する2、3のこと

岩間眞知子

令和五年十一月十一日（土）

（会場）埼玉会館5C会議室・Zoomのハイブリッド開催）
午後二時～

「古伊賀―破格のやきもの―」展

について（仮）

菅沢そわか

「裏千家の千猶鹿刀自の和歌について」

石塚修

令和六年二月十七日（土）

（会場）未定・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～

「益田克徳の茶とその周辺 その五」

神保乃倫子・八木京子

「織田有楽について（仮）」

西山剛

静岡例会

（決まり次第ホームページにてお知らせいたします。）

東海例会

（会場）昭和美術館会議室）
午後二時～三時半
（開場午後一時半～）

令和五年十一月二十五日（土）

「信楽焼―茶の湯の道具を中心に」
大槻倫子

近畿例会

令和五年十一月四日（土）
（会場）大阪私学会館307号室）
午後二時～四時

（午後一時半開場）

「藤田家と山本竹雲」
村田隆志



大阪私学会館
アクセスQRコード

「藤田家と茶」

國井星太

*会場は、藤田美術館（大阪市都島区）のすぐそばです。発表と合わせて観覧をお勧めいたします。

当日ご覧いただける展示テーマは、「江」藤田家茶会 藤田平太郎（江雪）が席主をとめた大正九年光悦会・「護る」国や信者を守護する仏教の道具・「妖」おとなの絵巻」です。

*チケットは各自ご購入ください。但し、例会前に観覧されます方は、美術館エントランスに茶の湯文化学会専用の受付（十一時三十分～十三時十五分）を設けておりますので、ご購入前に学会受付へお越しください。

令和六年（未定）

「未定」

八尾嘉男

『宗及茶湯日記（天王寺屋会記）』に見る戦国期の茶の湯の諸相
2

山田哲也

北陸例会

令和六年三月十六日（土）

（会場：富山市佐藤記念美術館）

午後二時～

『生成「Life is beautiful」展 富山の現代工芸作家について（仮）』

金沢例会

令和六年三月二十四日（日）

講演会（詳細未定）

高知例会

令和五年十二月十日（日）

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶ II」

正午～午後四時

軽食茶事 席主 三名

会費 二千元

（参会希望者はご連絡ください）

令和六年二月二十五日（日）

（会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室）

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶ III」

新刊紹介

『茶道バイリンガル辞典』

岡本浩一編著者 ヴィヴィアン・ロウ補訳者 大修館書店

定価二七、五〇〇円（税込）

『明代二大茶書 張源『茶録』・許

次紆『茶疏』全訳注』

岩間真知子訳注

講談社学術文庫2781

講談社

定価一、〇〇〇円（税別）

『野村得庵茶会記集成』

野村美術館学芸部編 思文閣出版（販売はされておられません。野村美術館または寄贈された大学図書館・博物館にお問い合わせください。）

※二〇二三年年度年会費を払込みくださいますようよろしくお願いいたします。

